

Title	情動コミュニケーションにおける表示・解読規則 : 概念的検討と日米比較調査
Author(s)	中村, 真
Citation	大阪大学人間科学部紀要. 1991, 17, p. 115-145
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/7911
rights	
Note	

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

Osaka University

情動コミュニケーションにおける表示・解読規則

—概念的検討と日米比較調査—

中 村 真

情動コミュニケーションにおける表示・解読規則

—概念的検討と日米比較調査—

第1章 表示・解読規則の概念的検討

1. 1. 導入

「なぜ、私たちには人の気持ちがわかるのだろうか。」「なぜ、人の気持ちを誤解することがこれほど多いのだろうか。」一見矛盾したこれらの問いは、我々にとって日常的で、かつ重要な問題のひとつである。情動のコミュニケーション、特に、表情を媒体とした情動コミュニケーションについての先行研究において、これら2つの問題は、それぞれ人間のコミュニケーションにおける生物学的側面と文化的側面との相互作用を反映していると考えられている (Ekman, 1973)。

なぜ人の気持ちがわかるのか。この問に対するひとつの回答は、ヒトは特定の情動状態を示す特定の表情を普遍的にもっているというものであり (Ekman, 1972; Ekman & Friesen, 1971; Ekman, Sorenson, & Friesen, 1969; Izard, 1968, 1971), 6つ程度の基本的な情動 (幸福, 悲しみ, 怒り, 恐れ, 嫌悪, 驚き) があるといわれている。一方, 情動の顔面表出は文化に依存したものだという文化相対主義的立場 (Cultural Relativism) からの主張もある (Klineberg, LaBarre, Birdwhistell, cited in Ekman, 1973)。このような情動表出の普遍性と文化依存的側面とを統合するため, Ekman and Friesen (1969) は, 神経文化モデル (Neuro-Cultural Model) を提唱した (図1参照)。神経文化モデルでは, 基本情動は顔面筋と連合した生物学的基盤をもつものと考えられているため, その表出はヒトという種に普遍的であることになる。一方, この情動と表出との関係に影響を与える要因として表示規則 (display rules) が仮定された。表示規則とは, 様々な社会的環境, 役割などのもとで, どの様に情動表出を管理するかについての社会的, 文化的規範や因習である (Ekman & Friesen, 1969; Ekman, 1973; Ekman & Friesen, 1975)。よって, このモデルによると, 情動表出の普遍性は情動と顔面筋との連合という生物学的側面を反映し, その文化依存性は表示規則の文化的差異を反映していることになる。

本論文では, 神経文化モデルの中心概念のひとつであり, 情動と文化の接点である表示規則に焦点を当て, 第1章では, その概念的検討を行い, 情動解読過程についてのモデルを構築する。つづいて第2, 3章では, 調査による日米比較研究の結果から, 表示 (解読) 規則と呼ばれうる, 文化に依存した知識が実際に存在していることを示す。最後に, 第4章で調査

結果とモデルの関係、今後の研究の展望について論じる。

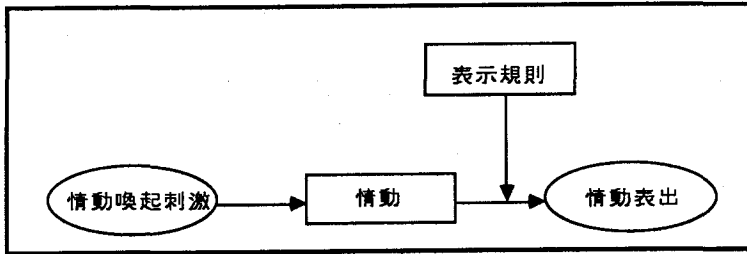


図1. 表示規則と情動表出過程 (Ekman (1972) に基づいて、筆者が略図にしたもの)

1. 2. 表示・解読規則と関連研究

文化的表示規則とは、ある社会的場面において、どのような情動を感じていることを示す(または示さない)べきかといった、適切な表出行動についての社会的因習である。例えば、プレゼントの送り手が受け手に喜んでもらえることを期待している場合、受け手は普通、たとえその贈物が気に入らなくても、がっかりした様子を見せることはない (Saarni, 1982)。このような規則は、全ての文化で必ずしも同じとは限らない。むしろ、どのような場面でもどのような表出行動をとるべきかは、文化に依存しているであろう。文化相対主義者の報告している文化による表出行動の変動は、この表示規則の文化による差異が反映されたものだと考えられる。

表示規則と類似した概念として、Hochschild (1979) は感情規則 (feeling rules) という概念を提唱している (図2参照)。この規則は、ある刺激場面に対してどのような感情をもつべきかについての知識、と定義される。表示規則との違いは、感情規則が主として情動の主観的側面に焦点を当てていることである。但し、表示規則と感情規則という2つの概念は、広義には、情動表出と文化を媒介するひとつの知識の異なる部分であると解釈できる。主観的経験や表出行動が潜在変数である情動を反映したものであると考えると、主観的経験とは、自身にのみアクセス可能な意識という内的世界への情動の表出であり、また、表出行動とは、主として他者にアクセス可能な外的世界への情動の表出であると考えられる。よって、表示規則と感情規則とは、いずれも情動の広い意味での表出を制御するための知識であり、以降この2つの概念を総称して表示規則と呼ぶことにする。

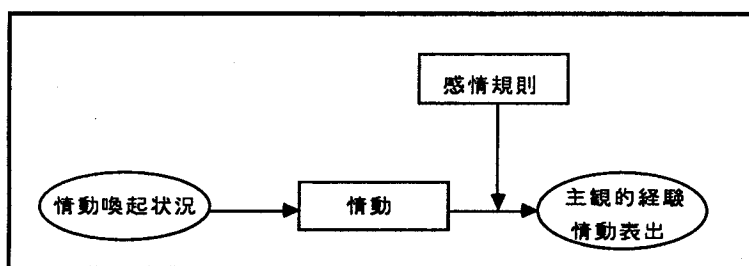


図2. 感情規則と情動表出過程 (Hochschild (1979) の説明に基づいて、筆者が図式化したもの)

さて、具体的に表示規則とはどのように情動の表出を制御しているのだろうか。Ekman and Friesen (1969) は表示規則の機能として以下に示す4つをあげている。

- ・ある情動を示す表出を弱める。
- ・ある情動を示す表出を過剰にする。
- ・情動を感じていないように見えるようにする。
- ・他の情動を示す表情を作り、実際に感じている情動を隠す。

このような文化的表示規則の機能を示す例として、Ekman and Friesen (1975) は日本人とアメリカ人を被験者として行った研究を紹介している。被験者は、まず、自分一人で2種類の映画を見、見終わるとその映画についてどのような情動を感じたかをインタビューされた。一方の映画は緊張を引き起こすような不快な内容のもので、他方は中性的な内容の映画であった。実験中の被験者の行動は隠しカメラで録画されていた。録画ビデオの分析から、一人で映画を見ているときの表情はアメリカ人も日本人も同様であったが、インタビューのときにはアメリカ人が映画に対して感じた否定的な情動を表出したのに対して、日本の学生は映画に対する否定的な情動を表出しようとはせず、それどころか肯定的な表情を作ろうとしたことが分かった。Ekman and Friesen (1975) はこの結果を、日本には社会的場面で、否定的情動の表出をより強く抑制する文化的表示規則があるためだと解釈している。Shimoda, Argyle, and Bitti (1978) も、イギリスやイタリアの学生と比較して、日本の学生は情動や態度をあまり明白に表出しない傾向があると報告している。

表示規則に関係する研究の例として、近年ヨーロッパを中心に行われた世界的な比較文化研究がある (Scherer, Summerfield, & Wallbott, 1983; Scherer, Wallbott, & Summerfield, 1986; Sommers & Kosmitzki, 1988; Wallbott & Scherer, 1986, 1988)。これらの研究は、情動経験と、それに先行する状況 (情動喚起状況)、情動反応、情動経験、表出の制御について

質問紙を用いて調査したものである。結果としては、例えば、恐れを制御することは比較的普遍的であるのに対して、ベルギーとフランスの被験者は、喜び、悲しみ、怒りについても強く制御すると報告している (Scherer, Wallbott, & Summerfield)。また、日本人を対象とした研究によると、日本人被験者はアメリカ人やヨーロッパ人と比較して、情動の表出行動と主観的経験の強度が低いという結果が得られている (Scherer, Wallbott, Matsu-moto, & Kudoh, 1989)。これらの結果もまた、文化的表示規則の差異を反映していると解釈することができる。

Saarni (1979, 1982, 1984) は、発達の視点から、表示規則の獲得についての研究を行っている。Saarni (1984) は子供 (1, 3, 5 学年児) が自分の表出行動を管理しようとするかどうかを研究するために、子供に望ましい報酬がもらえるだろうという期待をもたせ、実際は望ましくないものが与えられるという葛藤的な状況を作り出し、その時の表出行動を観察した。Goffman (cited in Saarni, 1984) によると、アメリカには、誰かが自分にプレゼントをくれたとき、実際はそれが気に入らなくても、喜んだり、微笑んだりして見せるべきだという表示規則がある。観察によって次のことがわかった。より年齢の低い子供 (特に男子) は、望ましくないプレゼントをもらったときに、否定的な行動を示すことが多かった。一方、年長の子供 (特に女子) は、肯定的な表出行動を維持する傾向が、より強かった。この結果は、文化的表示規則が発達の過程で学習され、年長になるにつれ子供はその規則に従って自分の表出行動を調整するようになるということを示唆していると考えられる。Saarni はこの結果を、表示規則に「気づくこと」、規則を「実行する能力」、そして、それを「実行する動機」、における発達的变化と関連させて考察している。

情動の解読についてはどの様に考えられるだろう。情動表出 (表情) は、相手の情動状態を知るうえで最も重要な情報源である。しかし、上述したように、表出行動はしばしば表示規則の影響を受け、必ずしも表出者の真の情動状態を示しているとは限らない。そのため、私たちは、表出者の真の情動状態を推測するためになんらかの規則を適用しなければならない。この規則は、情動表出から相手の情動を知るための解読規則 (decoding rules) と呼ばれ、情動についての情報のどこに注意を払うか、どの様に解釈するかについての文化的規則、期待と定義することができる (Buck, 1984)。解読規則と表示規則という概念は、ちょうどひとつのコインの裏と表の関係にあるといえよう。

解読規則という概念に直接焦点を当てた研究はこれまで行われていないようである。しかし、いくつかの研究を解読規則という視点から考察することは可能である。Blanck and Rosenthal (1982) と DePaulo and Rosenthal (1979) は、表情を含む複数の表出チャンネル (身体動作、口調、話の内容など) からの情報の矛盾を見つけ出す能力の発達的变化を調べている。チャンネル間の矛盾 (例えば、あまりありがたそうでない声で「ありがとう」と

言う場合)は一般に、表出者の嘘やごまかしを反映しているとされるが、ごまかしや嘘を見いだす能力をある種の解読規則を用いる能力と見なすことは可能であろう。Blanck, Rosenthal, DePauloらは、矛盾した情報を解釈する能力は年齢と共に変化することを見いだした。つまり、子供は年齢が上がるにつれ、予盾した情報を受け取ると、より信頼のおける情報源に注意を向けるようになる。信頼のおける情報源とは、表出者が自分自身で制御しにくく、真の情報が漏れやすい表出行動である。先行研究によれば、表出行動には次に示すような「漏れやすさ」(または、制御のしにくさ)の階層(leakage hierarchy)があるといわれている(Blank & Rosenthal, 1982; Ekman & Friesen, 1974)。異なる表出行動(例えば表情と口調)の間の矛盾は最も漏れやすく、超短時間表出(micromomentary expression)がそれに続き、口調、身体動作、表情と続く。よって、子供は、年齢と共に、表情より身体動作、身体動作より口調、というように、よりコントロールしにくい表出行動に注目するようになる傾向があると言えよう。

ちょうど表示規則が年齢と共に徐々に獲得されるように、解読規則も次第に学習されていくと考えられる。Saarni(1984)は表示規則に気づくこと・意識することは、表出行動を調節するためのひとつの重要な要因だと指摘しているが、この指摘は、表示規則と解読規則が分離できないものであるということを示唆している。なぜなら、どの様に情動表出をするべきかを知り、それを意識するということが、同時に、どの様に他者の表出を解釈すべきかを知ることにつながるからである。よって、解読規則は表示規則と同様に発達過程を通じて学習され、対人関係、社会的コミュニケーションにおいて重要な役割を果たしていると考えられる。

1. 3. 表示・解読規則の概念的検討

さて、以上、表示・解読規則についてその起源と先行研究の成果を概観してきた。これらの概念は、既存の研究結果をうまく説明できるという点で非常に有用であるが、反面あまりにも記述的で曖昧であり、実際に研究の対象とするにはより詳細な検討が必要である。

図1と2は、いずれも情動が喚起され表出される過程で、表示・感情規則が作用することを示している。上述したように、主観的経験を内的世界への情動の表出と考えれば、表示規則と感情規則は、広義の、表示のための規則であるといえる。このことを踏まえ、図1と2を因果モデル的に表現すると図3のようになる。つまり、刺激状況によって情動が生じ、その情動状態は主観的経験と情動行動という形で表出され、同時に情動の表出は表示規則からの影響を受ける。

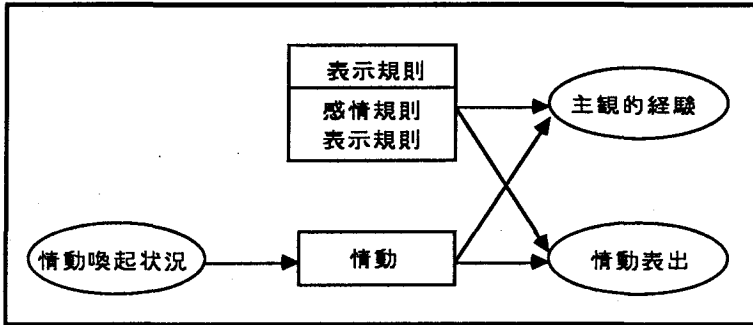


図3. 表示規則と情動表出過程のモデル1 (図1と2を一つにまとめ因果モデル的に示したものの)

次に吟味しておかなければならないことは、情動を喚起する刺激状況である。Ekman and Friesen のモデルでは、情動喚起刺激のみが取り上げられており、一方、Hochschild のモデルでは情動喚起状況という、より広範な要因が明示されている。実際には、Ekman にも情動喚起状況と呼ぶような要因についてもかなり詳細に論じており、この要因は明示的にモデルに取り込まれるべきであろう。

ところで、刺激状況を吟味することは、表示規則がどのように作用するのかを知る手がかりとなる。表示規則の機能は、本当の情動の表出を制御し、その状況にふさわしい表出行動をとることであるが、何によって表示規則の機能が喚起されるのかについては、今までのモデルは明示していない。詳細な吟味は次節に譲るが、表示規則を喚起するのは、インタビューする相手の存在 (Ekman and Friesen, 1975) やプレゼントをもらうというセッティング (Saarni, 1984) 等、様々な要因が考えられる。また、その場に適切な情動が何かを知るためには、その時の情動状態がわかっている必要があることになる。これらの関係を図4にまとめた。つまり、情動喚起状況においてある情動が喚起され、その情動は主観的経験、また表出行動として表出される。同時に、情動喚起状況は表示規則に作用し、その状況の特性とそれにふさわしい情動が何であるかを決定する。実際に喚起された情動を知ることにより、表示規則は適切な制御を主観的経験と表出行動に及ぼすと考えられる。

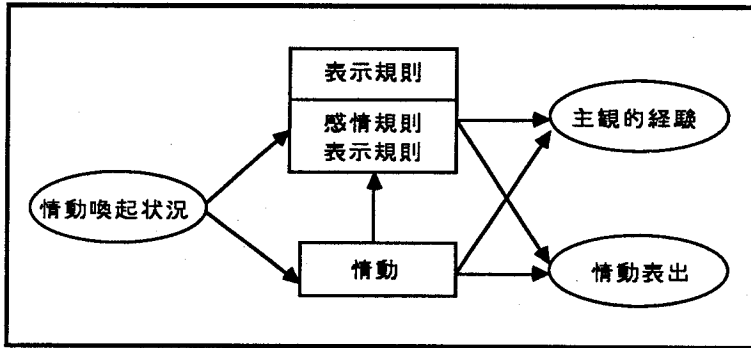


図4. 表示規則と情動表出過程のモデル2（表示規則を喚起する要因）

解釈規則についてはどのようなモデルを考えることができるだろう。解釈規則と表示規則がひとつのコインの裏と表であるとすれば、表示規則についてのモデルが解釈規則についてもそのまま当てはまるであろう。但し、表示規則のモデルでは表出行動が外生（従属）変数であったのに対して、解釈規則のモデルでは解釈者が判断した表出者の主観的経験が外生変数となる。これを図5に示した。解釈者は、相手（表出者）の表出行動や情動喚起状況からその人の主観的経験を判断しなければならない。この時、表出者の表出行動はその人の情動状態を知るうえで重要な役割を果たすであろう。同時に、情動喚起状況は、その人が本当に感じている情動を表出しているかどうかについての情報を提供する。その情報に基づいて相手の情動状態を判断するために解釈規則が必要となるのである。

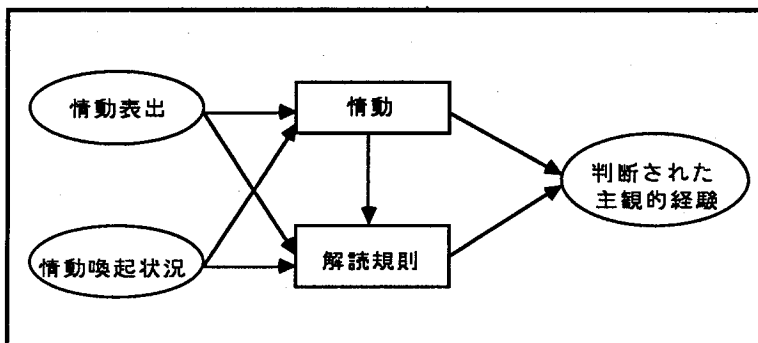


図5. 解釈規則と情動判断過程のモデル（図4を主観的経験を外生変数として変形したもの）

1. 4. 情動解読過程のモデル

前節では、表示・解読規則のモデルをより厳密に吟味するために因果モデルを用いて明示的に考察した。しかし、これらのモデルを実証的に検討可能なものにするためには、さらに考察を加えなければならない。この節では、解読規則に焦点を絞り、情動解読過程についてより具体的なモデルを構築する。

解読規則のモデルをより具体化するためには、図5に示した情動喚起状況について吟味を進めなくてはならない。Ekman, Friesen, and Ellsworth (1982) は、情動判断に影響を与える要因として、(1) タスクや物理的背景といった社会的セッティングの永続的特徴、(2) 顔の形態や役割といった表出者の永続的特徴、そして、(3) 物理的事象、第三者の行動、表情表出者の表情や他の行動などの一時的な事象、をあげている。

これらの要因は各情報源からの情報の質と、解読規則との関係などにより次の5つの項目にまとめることができるだろう。まず、(a) 表出者の表出行動があげられる。また、(b) 表出者に情動を引き起こした刺激についての情報があり、これには、第三者の行動、生物または無生物、物理的事象、など多くのものが考えられる。この刺激は情動喚起刺激と呼ばれる。これら2つの情報源(aとb)は、表出者の情動状態を判断するために直接利用可能である。つまり、表情を見ればその人の情動を推測することができるし、その人が何を見たのかを知れば、それによってその人の情動を推測することもできる。この他に、情動判断に影響を与える情報源としては、(c) 表出者の比較的安定した特徴、例えば、性、年齢、顔つき、社会的地位などがある。これらの情報は、表出者の不変的特徴と呼ぶことができる。また、(d) 表出者を取り巻く物理的、社会的環境、場面についての情報も利用可能である。ここではこの情報を状況についての情報と呼ぶ。(a)、(b)に対して、表出者の不変的特徴と状況からは表出者の情動を直接推定することはできない。これらの情報源は、表出者の情動についての情報ではなく、真の情動表出の制御についての情報を提供し、解読規則を通して間接的に情動判断へ影響を与えると考えることができる。さらに、(e) これらの情報の受け手、つまり解読者の特徴もまた重要であるかも知れない。特に、表出者との相互作用が可能な場合には、解読者自身の性や年齢、社会的地位などは、相手の表出行動を理解するうえで重要な役割を果たす可能性がある(Kenny & La Voie, 1984)。¹⁾

図6に、上述した刺激状況を考慮した情動判断過程のモデルを示す。このモデルは、解読者が表出者の情動状態を推定・判断しようとしており、表出行動と情動喚起刺激を含むいくつかの情報源が利用可能な場合、かつ、表出者と解読者の間に相互作用が無い場合に、それぞれの情報源からの情報がどのように処理され、情動の判断に寄与するのかを説明し、予測することを目的にしたものである。

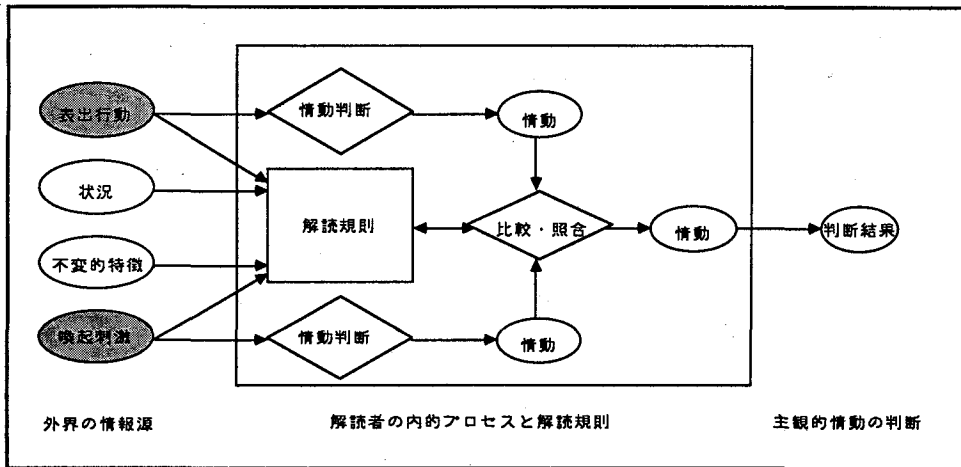


図6. 複数の情報源に基づく情動判断のモデル

このモデルによると、表出行動（特に表情）と情動喚起刺激は、それぞれ単独で情動についての情報を提供することができる（図中左の網掛けの楕円）。表出者の不変的特徴（年齢、性など）と状況は、解読規則を介して、表情と情動喚起刺激によって与えられる表出者の情動状態についての情報の処理に影響を与える。例えば、状況を記述する次元のひとつとして、その社会性があげられる（Knapp, 1984）。つまり、状況が社会的になればなるほど、一般的に、真の情動の表出は抑制されるであろうし（Gnepp & Hess, 1986; Yarczower & Daruns, 1982; Yarczower, Kilbride, & Hill, 1979）、表情の観察者もそう予測するだろう（Nakamura, 1988; 中村, 1989）。よって、状況の社会性は、表出行動から真の情動を解読するための重要な変数のひとつだといえよう。また、表出者の性や年齢も重要な変数である。なぜなら、表出者の年齢が高くなれば、一般に、真の情動の表出を制御する傾向が強くなるであろうし（Saarni, 1979, 1982, 1984; Yarczower & Daruns, 1982; Yarczower et al., 1979）、また、一般に男性より女性の方が表出的であることが知られているからだ（Buck, Miller, & Caul, 1974; Hall, 1978, 1979）。

このように、状況と表出者の不変的特徴についての情報は、表出行動の制御のレベルについての情報に還元される。よって、このモデルでは、解読規則を、状況と不変的特徴から

得られる表出者の表出行動の制御のレベルについての情報を考慮して、表出行動と情動喚起刺激から得られた表出者の情動状態についての情報の評価に影響を与えるものと捉える。

このモデルをプロセスモデル的に説明すると、まず、(1) 表出行動と情動喚起刺激のそれぞれから、独立に、表出者の情動状態についての情報が得られる。その情報によって推定・判断された情動がモデルの情動判断の右の楕円部分となる。(2a) この2つの情報源からの情報によって判断された情動は、比較・照合され、両者が同等であればそれが表出者の主観的情動状態だと見なされ、出力される。(2b) 一方、もし比較・照合の結果、2つの情動が異なるものだと見なされるとその情報が解読規則へと回され、ここではじめて解読規則が用いられることになる。(3) 解読規則はおもに状況、表出者の不変的特徴から得られる、表出者の表出行動の制御の程度についての情報を考慮し、表情と情動喚起刺激からの情動判断のプロセスを吟味する。(実際には、表情や情動喚起刺激からも、表出行動の制御についての情報は得られる。例えば、微笑んだ表情がこぼばっているとか、情動喚起刺激が贈物である場合、いずれも表出者は真の情動とは無関係に喜び・幸福の表情を作ろうと表出行動を制御するであろう。) 具体的には、状況や不変的特徴からの情報が、強い制御を示していれば、表出行動から得られる情報の重みを割り引き、情動喚起刺激から得られる情報を重みづけ、逆に、低い制御の程度を示していれば、表情を重視した判断をすることになる。(4) 解読規則の関与を受け、再び表出行動と情動喚起刺激の示す情動が吟味され、もう一度比較・照合される。ここで2つの情報源が示す情動が同等だと見なされれば出力され、もし異なると判断されればもう一度解読規則へフィードバックされ、(3) の処理を再び繰り返すことになる。

以下、ここで示した情動判断のモデルのもつ意義について論じる。はじめに紹介したように、表示・解読規則についての先行モデルは、どちらかといえば曖昧で、記述的なものであった。それに対し、ここで構築したモデルは、情動喚起状況をより詳細に分析することによって、具体的にどのような要因がどのようにして解読規則に影響を与え、また、それを介して、どのように情動の解読・判断に効果を及ぼすかを説明し、予測することができる。また、そのことによって、実証的な研究や調査によって検証可能な仮説を、より組織的に、かつ、明示的に示すことができるだろう。

さらに、既存の問題領域に検証可能な仮説を提供するという以外に、このモデルは近年心理学において注目を集めている情動と認知、行動と知識との関係を吟味することを可能にしてくれると思われる。つまり、このモデルは、ヒトという種に普遍的な情動表出という生物学的視点と、文化や発達のプロセスを通じて獲得された表示・解読規則という認知的視点を、それぞれ独立に扱うのではなく、両者を表出行動を通じた情動のコミュニケーションという立場から統合的に捉えるものである。よって、人間のもつ認知と情動という2つの側面が、どのように相互作用しているのかを検証するためのモデルでもあるといえる。

次章では、このモデルから予測される、表示・解読規則の一側面として、状況の社会性と表出の抑制との関係、そして、その文化差についての調査研究の結果を報告する。

第2章 調査 I

2. 1. 目的

日本人がアメリカ人と比較して、社会的な場面で否定的情動の表出をより強く抑制する表示規則をもっている、という観察研究 (Ekman & Friesen, 1975) を第1章で紹介した。しかし、日本人は本当にそのような規則をもっているのだろうか。もし、表出行動の観察結果から日本人の表示規則を推測し、その規則が観察結果をもたらしたと言うのであれば、それは循環論であろう。本研究の目的は、アメリカ人大学生と日本人大学生を被験者として、状況や情動の種類に応じた表出の制御についての規則があるか、そして、その規則に文化差があるかどうかを質問紙を用いて調査することである。

2. 2. 方法

【被験者】

米国: University of Connecticut (米国北東部州立大学) で Communication Science 導入コースを受講している学部生男女各 36 名。

日本: 大阪大学教養部生男女各 36 名。

【質問紙】

米国: 「ある感情を感じており、ある状況にいるとき、人は一般にその感情をどのように表出すると思うか」という問と、「本当の感情を全く表出しない—非常に表出する」、「肯定的な表情を全く作ろうとしない—非常に作ろうとする」、「否定的な表情を全く作ろうとしない—非常に作ろうとする」という3つの7段階尺度で構成された質問紙を作成した。

尚、問の中の「感情」は6つの基本情動 (幸福 (happiness), 悲しみ (sadness), 怒り (anger), 恐れ (fear), 驚き (surprise), 嫌悪 (disgust)) の一つであり、「状況」はリラックスした (relaxed), 非形式的な (informal), 私的な (private), 緊張した (tense), 形式的な (formal), 公然とした (public), の6つの中の一つであった。6つの情動と6つの状況を組織的に組み合わせ、36通りの質問項目を作った。以下に具体的な質問項目例と評定尺度を原語 (英語) で示す。

質問項目例: When a true feeling is disgust and a situation is public, people, in general

評定尺度: do not express true feelings at all-express true feelings very much

do not make positive expressions at all-make positive expressions very much

do not make negative expressions at all-make negative expressions very much

日本:「ある感情を感じており、ある状況にいるとき、表出者は一般にその感情をどのように表出すると思うか」という問と、「本当の感情を全く表出しないー非常に表出する」、「快の表情を全く作ろうとしないー非常に作ろうとする」、「不快の表情を全く作ろうとしないー非常に作ろうとする」という3つの7段階尺度で構成された質問紙を作成した。²⁾

尚、問の中の「感情」は米国で用いたものと同様の6つの基本情動の一つであり、「状況」は米国で用いたものに「自然な」と「人工的な」を加えた8つの中の一つであった。また、「表出者」として、「アメリカ人」と「自分自身」の2つを設定した。よって、6つの情動、8つの状況、そして2つの表出者を組織的に組み合わせ、96通りの質問項目を構成した。³⁾ 以下に具体的な質問項目例と評定尺度を示す。

質問項目例: 本当の感情が嫌悪であり(嫌悪を感じていて)、状況が公然としたものである場合、

あなた自身は

評定尺度: 本当の感情を全く表出しないー本当の感情を非常に表出する

快の表情を全く作ろうとしないー快の表情を非常に作ろうとする

不快の表情を全く作ろうとしないー不快の表情を非常に作ろうとする

【手続き】

この調査研究は、日米共に実験研究(Nakamura, 1988; 中村, 1989)の一部として行われた。セッション1としてアメリカ人表出者の表情について評定した後、その評定とは独立に本調査(セッション2)が実施された。セッション1が終わると、セッション2として被験者に上述した内容の質問紙を手渡し、セッション1と2は直接関係が無いこと、評定に正答・誤答は無いこと、あまり深く考え過ぎないこと、制限時間は無いこと、を文書と口頭で教示した。また、具体例を用いて質問項目の構成と評定方法について説明した。被験者が質問紙への評定に要した時間は、アメリカが10分前後、日本が20分前後であり、実験全体ではアメリカが30-40分、日本が40-50分であった。

2. 3. 結果

【分析】

従属変数として、3つの尺度値の中から「本当の感情を表出する程度」についての評定を分析した。これは、表出行動が本当の感情をどの程度反映しているかということが、表示・解読規則の基礎となっていると思われるからである。「快、もしくは肯定的」、「不快、もしくは否定的」表出を作る程度は、表示・解読規則の細部に、また、より具体的に関わっている尺度であるが、翻訳などの問題もあり以後分析はしない。尚、日本人被験者については、「自分自身」を表出者とした評定を従属変数とした。

独立変数としては、被験者の国籍と性別を被験者間要因、質問項目の情動と状況を被験者内要因として取り上げた。尚、「状況」については、日米共通に用いられた、リラックスした、非形式的な、私的な、緊張した、形式的な、公然とした、の6つの場合についての評定を分析の対象とし、リラックスした、非形式的な、私的な、を『個人的状況』、緊張した、形式的な、公然とした、を『社会的状況』と命名し2水準の変数として扱った。

以下、4要因(国籍 x 性別 x 情動 x 状況 (=2x2x6x2))の分散分析の結果を中心に結果を報告する。

【情動と状況の効果】

上述した4要因の分散分析の結果、状況と情動の有意な主効果が得られた(それぞれ $F(1,140) = 921.36$, $F(5,700) = 29.30$, $P < .0001$)。この結果は、状況や情動の種類によって、本当の感情を表出する程度が異なることを示しており、表出行動についてのある種の規則があることを示唆している。表1に国籍、性別、情動、状況別の平均評定値を示した。平均値の分析から(図7参照)、一般に社会的状況よりも個人的状況において本当の感情を表出する程度が高く、また、Scheffe法による多重比較の結果、他の情動に比べ、幸福と驚きが出されやすいことが判った($p < .05$)。但し、これらの主効果は、他の要因と交互作用しており、その詳細については以下で分析する。



図7. 状況、情動別の表出の程度

表1 本当の感情を表出する程度についての国籍と性、及び、状況別の平均値

国籍	性	状況	情 動						全体
			幸福	驚き	悲しみ	怒り	嫌悪	恐れ	
日 本	男	個人的	6.28	6.14	5.79	5.74	5.82	5.50	5.88
		社会的	4.39	4.07	3.86	3.73	3.23	3.68	3.83
		全体	5.33	5.10	4.83	4.73	4.52	4.59	4.85
	女	個人的	6.38	6.37	5.94	5.71	5.83	5.90	6.02
		社会的	4.56	4.44	3.66	3.56	3.54	4.12	3.98
		全体	5.47	5.40	4.80	4.64	4.69	5.01	5.00
全体	個人的	6.33	6.25	5.87	5.73	5.82	5.69	5.95	
	社会的	4.47	4.25	3.76	3.65	3.38	3.89	3.90	
	全体	5.40	5.25	4.81	4.69	4.60	4.79	4.92	
U S A	男	個人的	6.44	6.31	5.94	6.18	6.28	5.94	6.18
		社会的	4.56	4.90	3.75	4.13	4.21	4.36	4.32
		全体	5.50	5.60	4.84	5.15	5.25	5.15	5.25
	女	個人的	6.70	6.66	6.37	6.24	6.34	6.08	6.40
		社会的	4.74	4.53	3.06	3.44	3.57	3.91	3.88
		全体	5.72	5.59	4.72	4.84	4.96	5.00	5.14
全体	個人的	6.57	6.48	6.15	6.21	6.31	6.01	6.29	
	社会的	4.65	4.71	3.41	3.78	3.89	4.13	4.10	
	全体	5.61	5.60	4.78	5.00	5.10	5.07	5.19	
全 体	男	個人的	6.36	6.22	5.86	5.95	6.05	5.71	6.03
		社会的	4.47	4.48	3.81	3.93	3.71	4.01	4.07
		全体	5.42	5.35	4.84	4.94	4.88	4.86	5.05
	女	個人的	6.54	6.52	6.16	5.98	6.09	5.99	6.21
		社会的	4.65	4.48	3.36	3.50	3.56	4.01	3.93
		全体	5.60	5.50	4.76	4.74	4.82	5.00	5.07
全体	個人的	6.45	6.37	6.01	5.97	6.07	5.85	6.12	
	社会的	4.56	4.48	3.59	3.72	3.64	4.01	4.00	
	全体	5.51	5.42	4.80	4.84	4.85	4.93	5.06	

表中の数値は、「ある状況において、どのくらい本当の感情を表出するか」という問に対する「全く表出しない(1)」から「非常に表出する(7)」の7段階尺度への評定を、各セルの全ての被験者について平均したものの。

【国籍を含む効果】

上述した4要因の分散分析の結果、国籍の主効果も有意であった ($F(1,140) = 9.27, p < .01$)。これは、図8にも示したように、情動全般において(悲しみを除く)アメリカ人の方が本当の感情を表出しやすいことを示している。

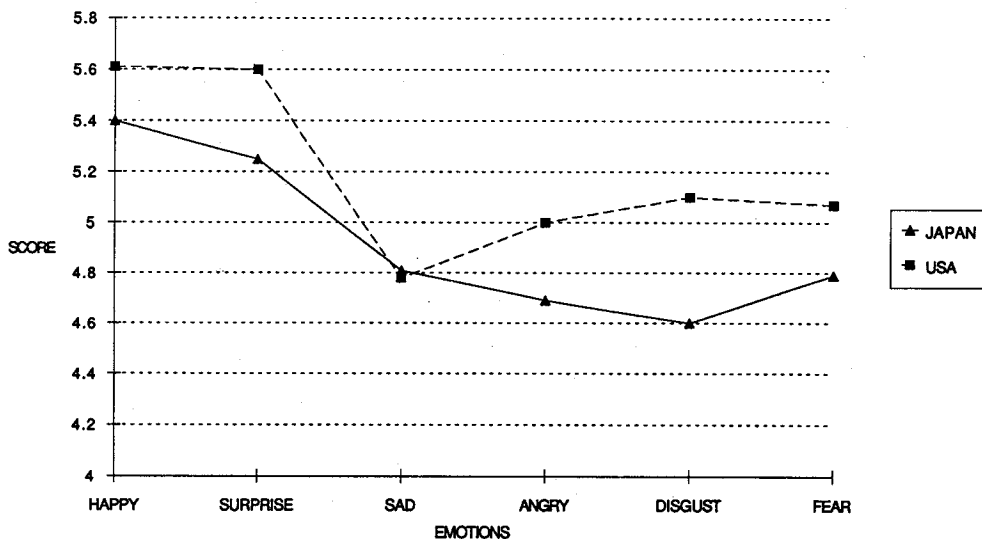


図8. 日本人とアメリカ人の本当の感情の表出の程度

図

また、国籍 x 性 x 状況, 国籍 x 状況 x 情動, の2つの交互作用が有意であった ($F(5,700) = 3.12, p < .01$; $F(1,140) = 5.80, p < .05$)。これら以外にも一次の交互作用が有意であったが、いずれもこの2つの交互作用の一部となっていたので、ここではこれら2つの2次の交互作用について分析を進めることにする。被験者の国籍別に、性 x 状況 x 情動の3要因の分散分析を行った結果、図9に示したようにアメリカ人においてのみ性 x 状況の交互作用が有意であった ($F(1,70) = 12.08, p < .001$)。この結果は、アメリカ人被験者については、男性に比べ女性において状況の効果が大きいことを示している。一方、日本人被験者には状況の捉え方に性差はなかった(図10)。

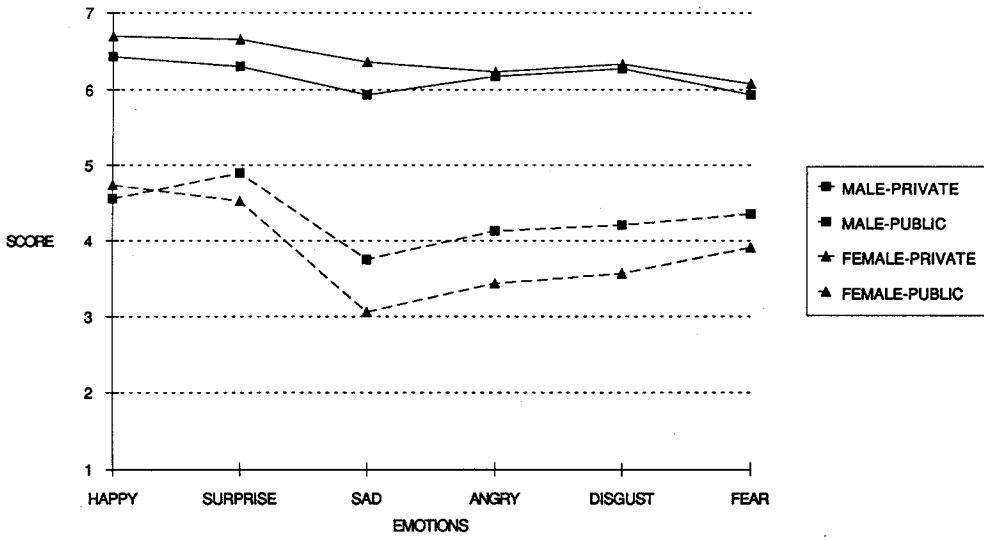


図9. アメリカ人の感情表出における状況と性の効果

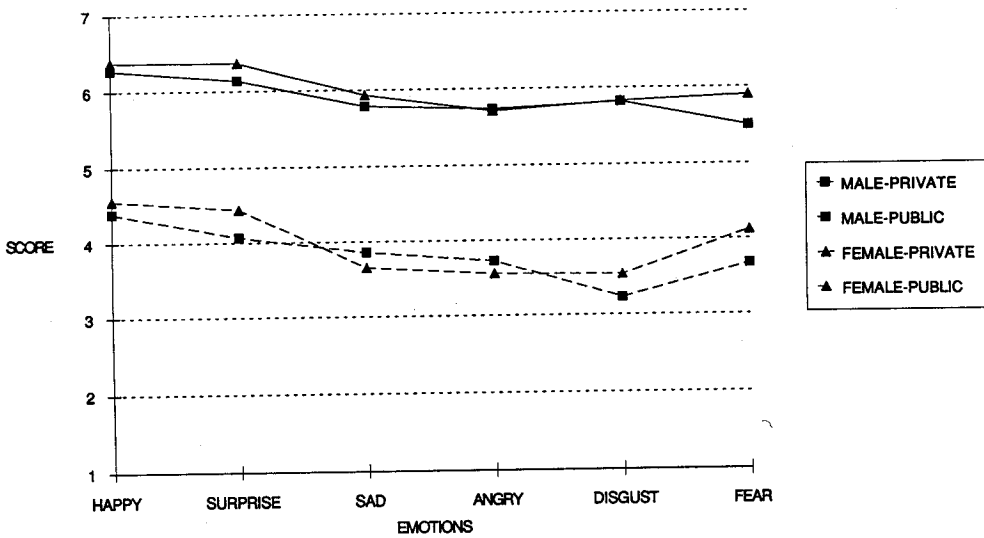


図10. 日本人の感情表出における状況と性の効果

次に、国籍と状況別に、性 x 情動の2要因の分散分析を行った結果、情動の主効果の内容が特に社会的状況においてアメリカ人と日本人とで異なることが分かった(図11)。つまり、日本人では表出の程度が、幸福、驚き、恐れ、悲しみ、怒り、嫌悪の順で小さくなるが、アメリカ人では驚き、幸福、恐れ、嫌悪、怒り、悲しみの順となった。

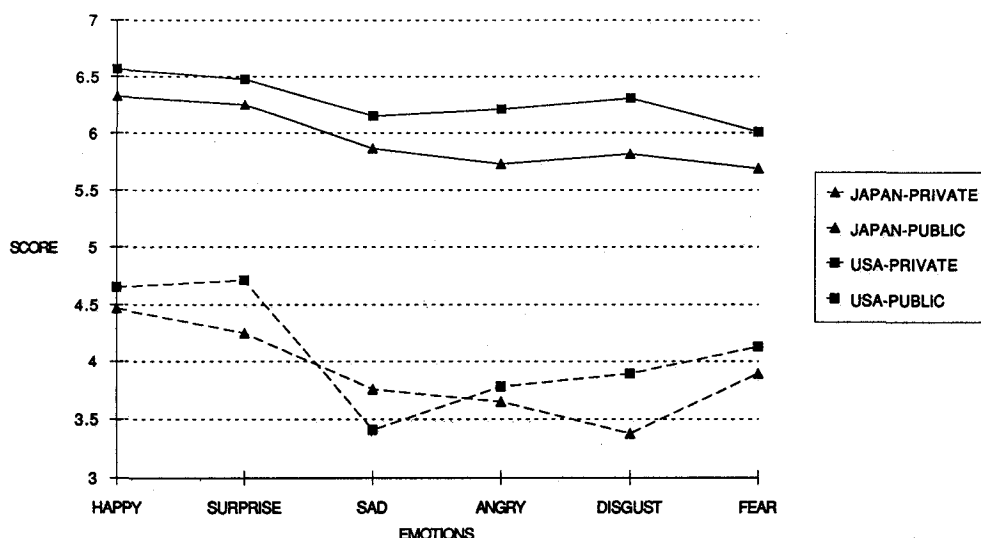


図 11. 日米間における状況と情動の効果の差異

2. 4. 考 察

結果を簡単にまとめると、状況や情動の主効果と両者の交互作用で示される、情動の表出の制御についての規則が日米両学生にみられた。さらに、この規則は、国籍を含む2次の交互作用に示されているように、国によって多少の差異があるようである。

今回の調査の結果は、社会的場面で、日本人はアメリカ人よりも否定的な感情の表出を抑制するという Ekman and Friesen (1975) の観察とよく対応している。具体的には、表出してはいけない(表出の程度が低い)情動が日本とアメリカで異なっており、日本では嫌悪が最も表出されにくい情動で、アメリカでは悲しみがそうである。この結果は非常に興味深い。なぜなら、Ekman and Friesen が報告した日米学生を用いた実験では、刺激となる映画は嫌悪を感じさせるものであったと考えられるからだ。つまり、アメリカ人が比較的表出的であったのは、ただ一般的な傾向として表出的だったからだけではなく、嫌悪という情動がアメリカ人にとっては比較的表出しやすい情動であったからだと考えられる。これに対して、日本人学生にとっては嫌悪は最も表出しにくい情動であったのである。刺激の映画が悲しみ

を引き起こすものであったなら、また異なる結果が得られたかもしれない。

しかし、いずれにしても、この調査研究の結果は Ekman and Friesen の研究結果とよく対応しており、彼らの主張を支持するものである。また、性差は、アメリカ人においてのみ見られたが、この結果は女性が対人コミュニケーションにおける様々な情報に敏感であるというアメリカ人を被験者とした先行研究の結果 (e. g., Hall, 1979) と一貫したものである。アメリカ人以外の被験者における性の効果についてはこれから研究を進めていく必要がある。

2. 5. 問題点

この調査の問題点のひとつとして、サンプル数の少なさ、つまり各文化において一つのグループで、一時点でしかサンプリングしていないことがあげられる。日米大学生という一般化を行うためには各文化において少なくとも2つのサンプリングが必要だと思われる。また、翻訳における訳語の適切さも問題点の一つである。この問題は単に語学的なものに限られない。それぞれの概念が各文化でどのように認識されるのか、例えば、「形式的な」状況という概念が2つの文化でどのような認知的・意味的構造をもっているかについては検討されていない。

これらの問題に加え、この調査には方法論的に問題となる点がある。つまり、日本とアメリカの被験者で、表出者（評定の立場）が異なることである。具体的には、アメリカ人は質問項目に対して、「人は、一般に (people, in general) どの程度表出すると思うか」についての評定をし、一方、日本人は「自分自身はどの程度表出するか」を評定している。結局、「人は一般に」とは、「自分自身」を平均化したものだとも考えることができ、その意味で日米のデータを直接比較することは無意味ではないといえるかもしれない。しかし、調査の本来の目的は、表出行動を解読する場合の文化的な規則・知識を調べることであり、その意味では「人は、一般にどう思うか」、を調べるのがより適切だと思われる。

次章で報告する調査Ⅱは、これらの問題点の一部に対処するために日本人大学生を対象に行ったものである。

第3章 調査Ⅱ

3. 1. 目的

調査Ⅱの目的は、調査Ⅰで指摘した問題点の中のサンプリングの問題の一部に対処し（日本人被験者での追試）、方法論的問題（「人は一般に」と「自分自身」での評定の異同）を吟味し、より妥当な日米比較を行うことである。

3. 2. 方法

【被験者】

大阪大学人間科学部生 20 名（男女各 10 名）。

【質問紙】

質問紙の構成、質問項目など基本的に調査 I の日本人用のものに準じている。「ある感情を感じており、ある状況にいるとき、表出者は一般にその感情をどのように表出すると思うか」という問と「本当の感情を全く表出しない—非常に表出する」という 7 段階尺度から構成された質問紙を作成した。

調査 I と同様、問の中の「感情」は 6 つの基本情動（幸福、悲しみ、怒り、恐れ、驚き、嫌悪）の一つであり、「状況」はリラックスした、非形式的な、私的な、自然な、緊張した、形式的な、公然とした、人工的な、の 8 つの中の一つであった。また、「表出者」として、「人は、一般に」と「自分自身」の 2 つを設定した。6 つの情動、8 つの状況、そして 2 つの表出者を組織的に組み合わせ、96 通りの質問項目を作った。具体的な質問項目と評定尺度は、調査 I と同様であった。

【手続き】

被験者に上述した内容の質問紙を手渡し、評定に正答・誤答は無いこと、あまり深く考え過ぎないこと、制限時間は無いこと、を文書と口頭で教示した。また、具体例を用いて質問項目の構成と評定方法について説明した。被験者が質問紙への評定に要した時間は 15 分前後であった。

3. 3. 結果

【分析】

「本当の感情を表出する程度」についての評定を従属変数とし、被験者の性別（被験者間要因）、質問項目の情動、状況、表出者（被験者内要因）を独立変数として 4 要因（性別 x 情動 x 状況 x 表出者（ $=2 \times 6 \times 2 \times 2$ ））の分散分析を行った。尚、「状況」については、リラックスした、非形式的な、私的な、自然な、を『個人的状況』、緊張した、形式的な、公然とした、人工的な、を『社会的状況』と命名し 2 水準の変数として扱った。

【情動と状況の効果】

上述の 4 要因の分散分析の結果、状況と情動の主効果が有意であった（それぞれ $F(1, 18) = 174.94$, $F(5, 90) = 6.76$, $p < .0001$ ）。これは、図 12 に示したように、社会的状況よりも個人的状況において本当の感情が表出されやすく、また、幸福と驚きが他の情動よりも表出されやすいことを意味している（ $p < .05$ ）。以下で報告するように、状況 x 表出者の交互作用が有意であったが、全体として、これらの結果は、調査 I の結果と非常によく一貫したもので

ある。

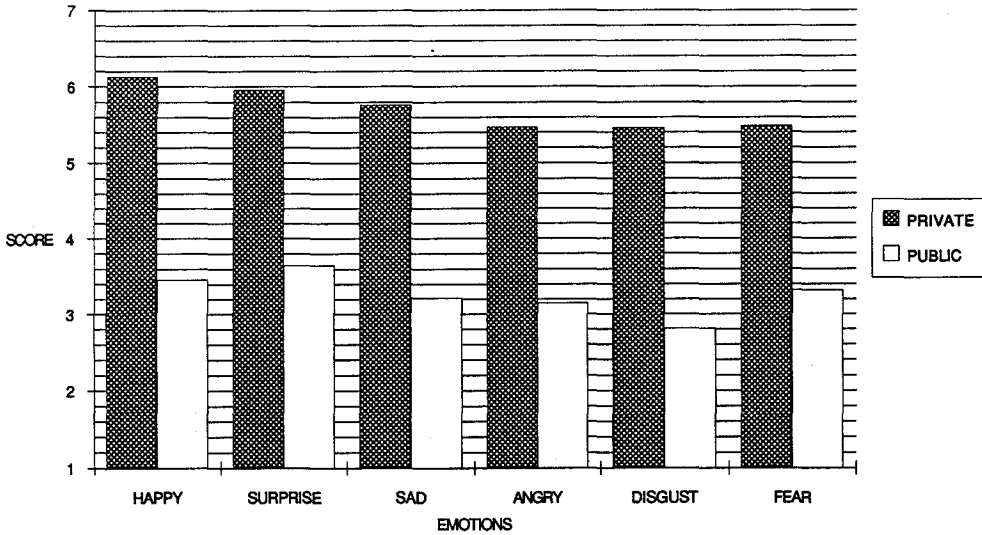


図 12. 調査Ⅱにおける状況、情動別の表出の程度

【表出者の効果】

上述した4要因の分散分析の結果、表出者の主効果が有意であった ($F(1, 18) = 90.57, P < .05$)。また、この効果は状況と有意に交互作用していることが分かった ($F(1, 18) = 19.00, p < .05$)。表2に、性別、情動、状況、表出者別の平均評定値を示した。平均値の分析から、全体として「自分自身」より、「人は一般に」の方が表出の程度が高く評定され、それが個人的状況においてのみ見られることが分かった ($F(1, 18) = 96.27, p < .01$: 図13参照)。つまり、被験者は、個人的状況における評定において「人は一般に」、「自分自身」より表出的だとみなしていると言えよう。尚、これらの効果は、情動や性別などとは交絡していなかった。

以上の結果から、表出者の違いによる評定の差は、性別や情動とは組織的に関係しているとはいえない。よって、考察では、アメリカでの調査と対応している「人は一般に」の評定を中心に、調査Ⅰの結果と対照させながら分析を進める。

表2 本当の感情を表出する程度についての表出者と性、及び、状況別の平均値

表出者	性	状況	情 動						
			幸福	驚き	悲しみ	怒り	嫌悪	恐れ	全体
自分自身	男	個人的	5.50	5.50	4.80	4.80	4.85	4.67	5.02
		社会的	3.27	3.50	2.67	3.42	2.88	2.90	3.11
		全体	4.39	4.50	3.74	4.11	3.86	3.79	4.06
	女	個人的	5.80	5.55	5.00	4.95	4.75	4.77	5.14
		社会的	3.32	3.30	2.75	2.77	2.72	2.90	2.96
		全体	4.56	4.42	3.88	3.86	3.74	3.84	4.05
	全体	個人的	5.65	5.52	4.90	4.88	4.80	4.72	5.08
		社会的	3.30	3.40	2.71	3.10	2.80	2.90	3.04
		全体	4.47	4.46	3.81	3.99	3.80	3.81	4.06
一般人	男	個人的	6.15	6.17	5.70	5.45	5.20	5.55	5.70
		社会的	3.67	3.72	3.38	3.19	2.77	3.32	3.33
		全体	4.91	4.95	4.54	4.29	3.99	4.44	4.52
	女	個人的	6.10	5.75	5.82	5.50	5.72	5.42	5.72
		社会的	3.25	3.57	3.07	3.17	2.85	3.32	3.21
		全体	4.67	4.66	4.45	4.34	4.29	4.38	4.46
	全体	個人的	6.13	5.96	5.76	5.47	5.46	5.49	5.71
		社会的	3.46	3.65	3.22	3.15	2.81	3.32	3.27
		全体	4.79	4.81	4.49	4.31	4.14	4.41	4.49

表中の数値は、「ある状況において、どのくらい本当の感情を表出するか」という問に対する「全く表出しない(1)」から「非常に表出する(7)」の7段階尺度への評定を、各セルの全ての被験者について平均したもの。
表出者：上述の問に対して「自分自身」と「人は一般に」どうするかを評定させた。

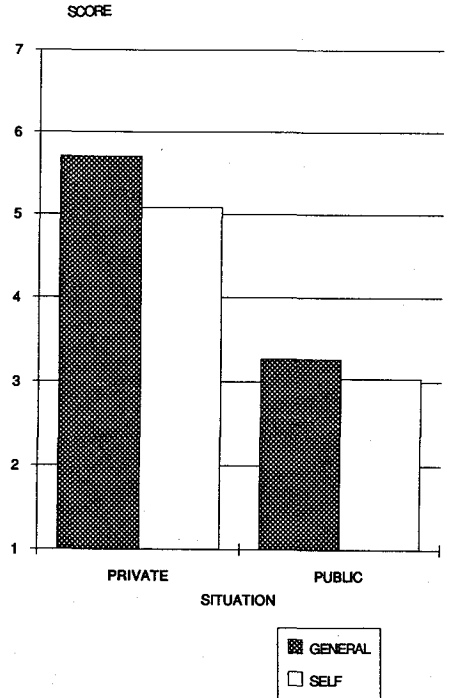


図13. 表出者と状況の交互作用

3. 4. 考 察

図14に、調査Iと調査IIの情動ごとの評定値の平均を示す。白抜ききのグラフが調査Iの結果で、太い実線のグラフが調査IIの結果である。図からも明らかなように、日本人被験者の情動ごとの表出の程度は調査IとIIでかなりの差があり、一貫して「自分自身(調査I)」より「人は一般に(調査II)」の評定が低くなっている。しかし、表出のパターンについては、2つの調査で幸福と驚きの順序が入れ替わっていることを除けば、非常によく対応している。このことは、調査Iでの考察をほぼそのまま受け入れてよいことを示唆している。つまり、表出しやすい情動は、アメリカ人の場合、幸福、驚き、嫌悪、恐れ、怒り、悲しみの順となり、日本人では、幸福(又は、驚き)、悲しみ、恐れ、怒り、嫌悪となっている。

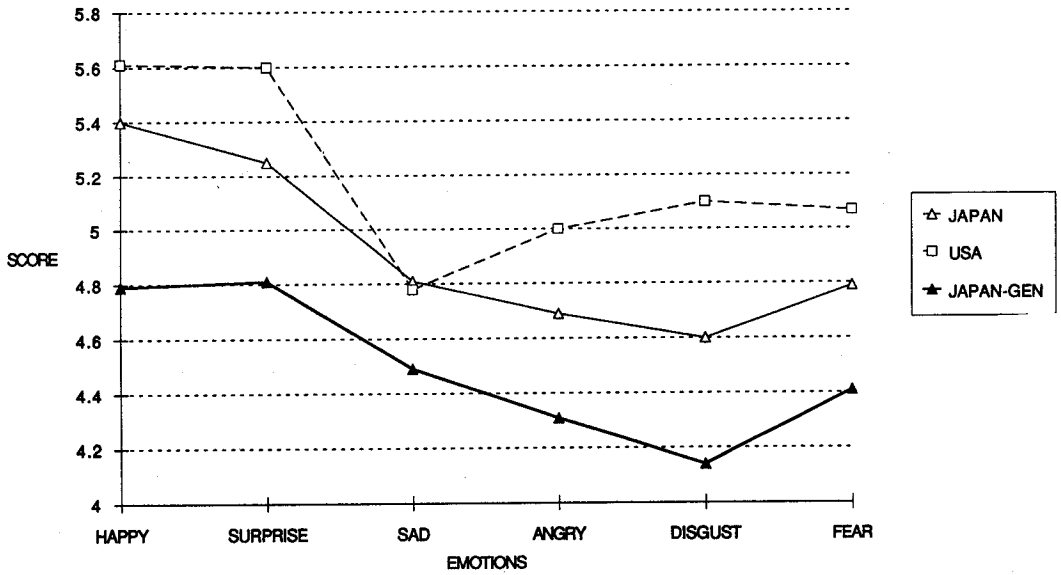


図 14. 情動別の表出の程度 (調査 I の結果との比較)

状況別に各情動の表出の程度を示したものを図 15 に示す。状況をプールした場合と同様、表出の程度は「人は一般に」の方が低くなっている。但し、この傾向は個人的状況よりも社会的状況においてより顕著である。一方、情動ごとの表出パターンについては、2つの調査の結果はよく対応している。

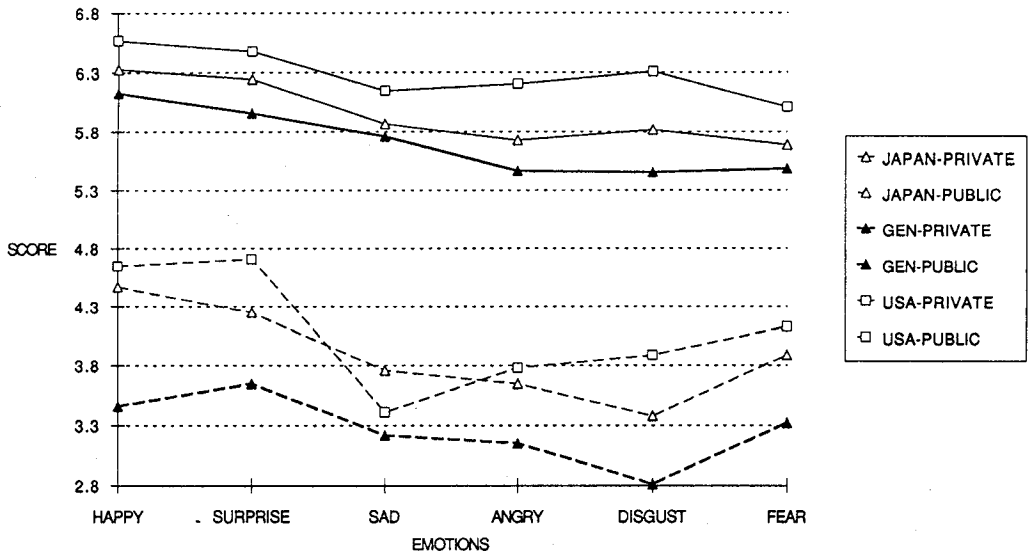


図 15. 状況、情動別の表出の程度 (調査 I の結果との比較)

調査ⅠとⅡの結果をまとめると、まず、調査Ⅰで問題となっていた、日米間で表出者が異なっていたことの影響は、質的な面ではほとんど無い。つまり、日本人被験者は、「自分自身」を表出者とした場合と、「人は一般に」を表出者とした場合の両方で非常によく対応した評定を行った（幸福と驚きの順序が異なることを除く）。このことは、さらに、調査Ⅰの結果をそのまま日本人被験者の解釈規則とみなし、比較文化的分析を行ったことが妥当であることを示していると言えよう。

但し、量的な側面では、調査Ⅱの結果個人的状況において「人は一般に」よりも「自分自身」の方が表出程度が低いことが分かっており、このことは、調査Ⅰで日本人被験者に、「自分自身」の代わりに「人は一般に」の評定を行わせていけば、評定がより高くなったかもしれないことを示唆している。つまり、日本人よりアメリカ人の方が全体として表出の程度が高いという調査Ⅰの結果は、調査Ⅱの結果を踏まえて考えると、必ずしも妥当とは言えない。調査Ⅱの結果が、調査Ⅰと比べ全般的に表出の程度を低くみなしていることは印象的だが、以上の論議から日本人がアメリカ人より表出の程度を低く評定するという結論を得るには、さらに研究が必要である。

第4章 総合論議

この章では、まず、表示・解釈規則の概念的検討と調査研究のそれぞれについてまとめ、続いて、両者の関連と今後の研究の課題・問題の提起を行う。

第1章においては、情動表出と判断における文化普遍性と文化相対性を統合するために提唱された表示・解釈規則という概念の検討を行った。人間においていくつかの基本的な情動表出は普遍的であるという研究と、情動表出は文化により様々だという研究は相容れないものに思える。しかし、表示規則という概念を仮定し、情動表出には本来普遍的な側面もあるが、文化的に獲得された適切な表出行動についての知識もまた、表出行動に影響を与えていると考えることで、文化依存的な側面をも説明することができた。

さらに、解釈規則に注目し、より詳細に情動解釈過程を吟味することによって、情動判断のモデルを構築した。このモデルによると、解釈者は、表出者の不変的特徴や状況といった情報を得、それを情動の判断に役立てている。表出者の不変的特徴とは、年齢や性別、社会的地位などの比較的安定した性質であり、状況とは、表出者を取り巻く社会・物理的環境をさす。これらの情報は、表出者の情動については何も教えてくれないが、情動表出の制御についての情報を提供し、それが解釈規則を介して情動の判断に寄与しているのである。

このようなモデルを構築することによって、私たちは実験的に検証可能な仮説を組織的に導くことができる。つまり、状況や不変的特徴といった要因が情動表出に一定のパターンで

影響を与えていると予想することができる。具体的には、表出者の年齢を変数にすれば、年齢が低ければ低いほど表出行動は自発的なものだと予測できるであろう。また、状況の社会性という次元を考えれば、社会的な状況であればあるほど、表出は制御されたものになるであろうし、逆に私的な状況であれば、表出は自然なものだと解釈される。このような予想を立て、それを実証的に調べることによって、表示・解読規則の内容を検証していくことができ、さらに、どの要因がどのような仕方でも情動の判断に影響しているのかを知ることができるであろう。

また、より大きな視点から見れば、このモデルは、解読規則という文化的に獲得された知識が、情動表出という行動とどのように相互作用しているかを探るためのひとつのアプローチを提供している。よって、このモデルは単に情動判断というだけではなく、情動（行動）と認知（知識）の相互作用というきわめて今日的な問題を、情動のコミュニケーションという視点から組織的に捉えていく方法を提供していると思われる。

一方、第2、3章においては、文化的解読規則と呼ばれうる、表出行動の制御についての知識が本当にあるのか、また、本当に文化に依存したものかを調べるために行った調査の結果について報告した。結論から言えば、日米大学生の被験者においては、社会的状況において効果をもつ、それぞれの文化に特有の表出行動の制御についての知識があった。具体的には、アメリカ人にとって悲しみは嫌悪よりも表出しにくく、日本人にとってはその逆に嫌悪よりも悲しみの方が表出しやすいことがわかった。この結果は、日本人大学生が嫌悪の表情を表出しない傾向があるという、観察に基づく先行研究の結果とも一貫している。非常に興味深いことに、私的状況においてはこのような質的文化差はみられなかった。以上のことより、この調査結果は、文化に依存した情動表出の制御についての知識があることを示していると考えてよいであろう。

最後に、モデルと調査の関係と今後の展望について述べる。調査の結果、文化に依存した情動表出についての知識があることがわかり、解読規則という概念が妥当なものであることが示された。我々は、この調査の結果とモデルとに基づき、情動コミュニケーション（情動解読過程）についての具体的な仮説を導くことができるであろう。例えば、「社会的状況において、嫌悪を喚起する刺激に対面している表出者の表情が中性的である場合、日本人解読者はアメリカ人解読者と比較して、表出者がより嫌悪を感じていると判断する」という仮説を立てることができる。このような仮説は、質問紙調査とともに、実際の解読者の判断を用いた実験的な研究によっても検証する必要があるだろう。例えば、中村（1989）と Nakamura, Buck, and Kenny（1990）は、情動判断における状況情報の効果について実証的に検討し、状況についての情報は、調査によって捉えられた知識のみならず実際の情動判断にも影響を与えていることを見いだした。今後の課題として最も重要なことは、知識のみの調査ではな

く、いかに実際のパフォーマンスを捉えていくかということである。

また、表示・解読規則とは本来情動表出の文化差を説明するために仮定された概念であるが、これらの規則に影響を与えるのは文化に限られるわけではない。例えば、発達（年齢）は重要な要因のひとつであり、幼い子供は発達の過程を通じてそのような知識を身につけていくようだ。もしそうだとすると、情動表出の制御についての知識が、発達の過程を通じてどの様に獲得されていくのか、また、獲得された知識が実際の行動にどの様に現れるのかを検討することにより、モデルをより洗練されたものにすることができるであろう。

引用文献

- Blanck, P. D. & Rosenthal, R. (1982) . Developing strategies for decoding 'leaky' messages : On learning how and when to decode discrepant and consistent social communications. In R. S. Feldman (Ed.) *Development of Nonverbal Behavior in Children*. New York : Springer-Verlag.
- Buck, R. (1984) . *The communication of emotion*. New York : Guilford Press.
- Buck, R., Miller, R. E., & Caul, W. F. (1974) . Sex, personality, and physiological variables in the communication of affect via facial expression. *Journal of Personality and Social Psychology*, Vol. 30, No. 4, 587-596.
- DePaulo, B. M. & Rosenthal, R. (1979) . Age changes in nonverbal decoding skills : Evidence for increasing differentiation. *Merrill-Palmer Quarterly*, Vol. 25, No. 2, 145-150.
- Ekman, P. (1972) . Universals and cultural differences in facial expressions of emotion. In J. Cole (Ed.) , *Nebraska Symposium on Motivation*, 1971 (Vol. 19) . Lincoln : University of Nebraska Press.
- Ekman, P. (1973) . Cross-cultural studies of facial expression. In P. Ekman (Ed.) , *Darwin and facial expression*. New York : Academic Press.
- Ekman, P. & Friesen, W. V. (1969) . The repertoire of nonverbal behavior : Categories, origins, usage, and coding. *Semiotica*, 1, 49-98.
- Ekman, P. & Friesen, W. V. (1971) . Constants across cultures in face and emotion. *Journal of Personality and Social Psychology*, 17, 124-129.
- Ekman, P. & Friesen, W. V. (1974) . Detecting deception from the body or face. *Journal of Personality and Social Psychology*, Vol. 29, No. 3, 288-298.
- Ekman, P. & Friesen, W. V. (1975) . *Unmasking the face*. Englewood Cliffs, N. J. : Prentice-Hall.
- Ekman, P., Friesen, W. V., & Ellsworth, P. (1982) . What are the relative contributions of facial behavior and contextual information to the judgment of emotion? In P. Ekman (Ed.) , *Emotion in the human face*, 2nd ed. Cambridge : Cambridge University Press.
- Ekman, P., Sorenson, E. R., & Friesen, W. V. (1969) . Pan-cultural elements in facial displays of emotion. *Science*, 164 (3875) , 86-88.
- Gnepp, J. & Hess, D. L. R. (1986) . Children's understanding of verbal and facial display rules. *Developmental Psychology*, Vol. 22, No. 1, 103-108.
- Hall, J. A. (1978) . Gender effects in decoding nonverbal cues. *Psychological Bulletin*, 85, 845-857.
- Hall, J. A. (1979) . Gender, gender roles, and nonverbal communication skills. In R. Rosenthal (Ed.) , *Skills in nonverbal communication*. Cambridge, MA. : Oelgeschlager, Gunn & Hain.
- Hochschild, A. R. (1979) . Emotion work, feeling rules, and social structure. *American Journal of Sociology*, Vol. 85, No. 3, 551-575.
- Izard, C. E. (1971) . *The face of emotion*. New York : Appleton.
- Izard, C. E. (1977) . *Human emotions*. New York : Plenum Press.
- Kenny, D. A., & La Voie, L. (1984) . The social relations model. In L. Berkowitz (Ed.) , *Advances in experimental social psychology*, Vol. 18 (pp. 141-182) . Orlando, FL : Academic.

- Knapp, M. L. (1984) . *Interpersonal communication and human relationship*. Boston : Allyn and Bacon.
- Nakamura, M. (1988) . *Relative contributions of facial expression and contextual information to the judgment of emotional state of the other*. Unpublished master thesis. University of Connecticut.
- 中村真 (1989) . 情動判断における表情と情動喚起刺激の相対的寄与. 大阪大学大学院人間科学研究科修士論文.
- Nakamura, M., Buck, R., & Kenny, D. A. (1990) . *Relative contributions of expressive behavior and contextual information to the judgment of the emotional state of another*. *Journal of Personality and Social Psychology*, Vol. 59, No. 5, 1032-1039.
- Saarni, C. (1979) . *Children's understanding of display rules for expressive behavior*. *Developmental Psychology*, 15, 424-429.
- Saarni, C. (1982) . *Social and affective functions of nonverbal behavior : Developmental concerns*. In R. S. Feldman (Ed.) *Development of Nonverbal Behavior in Children*. New York. Springer-Verlag : New York.
- Saarni, C. (1984) . *An observational study of children's attempts to monitor their expressive behavior*. *Child Development*, 55, 1504-1513.
- Scherer, K. R., Summerfield, A. B., & Wallbott, H. G. (1983) . *Cross-national research on antecedents and components of emotion : A progress report*. *Social Science Information*, 22, 3, 355-385.
- Scherer, K. R., Wallbott, H. G., Matsumoto, D., & Kudoh, T. (1989) . *Emotional experience in cultural context : A comparison between Europe, Japan, and the United States*. In K. R. Scherer (Ed.) , *Facets of emotion*. New Jersey : Laurence Erlbaum.
- Scherer, K., Wallbott, H. G., & Summerfield, A. B. (1986) . *Experiencing emotion : A cross-cultural study*. Cambridge : Cambridge University Press.
- Shimoda, K., Argyle, M., & Ricci-Bitti, P. (1978) . *The intercultural recognition of emotional expressions by three national racial groups : English, Italian, and Japanese*. *European Journal of Social Psychology*, 8, 169-179.
- Sommers, S. & Kosmitzki, C. (1988) . *Emotion and social context : An American-German comparison*. *British Journal of Social Psychology*, 27, 35-49.
- Wallbott, H. G. & Scherer, K. R. (1986) . *How universal and specific is emotional experience? Evidence from 27 countries on five continents*. *Social Science Information*, 25, 4, 763-795.
- Wallbott, H. G. & Scherer, K. R. (1988) . *Emotion and economic development -Data and speculations concerning the relationship between economic factors and emotional experience*. *European Journal of Social Psychology*, Vol. 18, 267-273.
- Yarczower, M. & Daruns, L. (1982) . *Social inhibition of spontaneous facial expressions in children*. *Journal of Personality and Social Psychology*, Vol. 43, No. 4, 831-837.
- Yarczower, M., Kilbride, J. E., & Hill, L. A. (1979) . *Imitation and inhibition of facial expression*. *Developmental Psychology*, Vol. 15, No. 4, 453-454.

(注1) 本研究では、情動解読過程を理解するための第一歩として、表出者と解読者の相互作用が無い場合を想定してモデルを構築する。よって、解読者の特徴は以降の考察の対象から外す。

(注2) positive と negative の訳語をそれぞれ快と不快としたのは、肯定的、否定的表出という言い方が日本語の感情表出について一般的な表現ではないと思われたからである。

(注3) 状況として2項目を追加した理由は、「自然な」と「人工的な」という項目が、日本人被験者にとって状況を弁別する上で重要な尺度となっていると思われたからである(中村,1989)。また、表出者を「アメリカ人」と「自分自身」としたのは、日本人被験者を対象にこの調査と同時に行った研究において、アメリカ人表出者の表情についての評定を行ったためである。「アメリカ人」に対して「日本人」とすると、日本人のステレオタイプについての評定になり、また、「アメリカ人」に対して「人は一般に」とすると「人」が何をさすのかが曖昧になると思われたため「自分自身」についての評定を採用した(中村,1989)。

DISPLAY AND DECODING RULES IN THE COMMUNICATION OF
EMOTION : AN CONCEPTUAL ANALYSIS
AND CROSS-CULTURAL QUESTIONNAIRE STUDIES

Makoto NAKAMURA

This paper examined the concept of display and decoding rules in the context of the communication of emotion. Display rules have been defined as cultural or social norms and conventions which control the display of emotion in a social situation (Ekman & Friesen, 1969) . By assuming display rules, the conflicting results of the previous studies by biologically oriented researchers and cultural relativists turned out to be consistent ones. Cross-cultural studies and developmental studies were reviewed and found to support the concept of display rules.

As the opposite side of a same token, decoding rules have been defined as cultural rules or expectations about the attention to, and interpretation of, emotion displays (Buck, 1984) . Decoding rules are necessary to interpret emotion displays which do not always reflect the true emotional state due to the control by display rules.

Several schematic models were presented in terms of the relationships between display rules and emotion expressions and between decoding rules and emotion judgments. It was suggested that the preceding models of emotion displays and judgments were generally descriptive and thus vague.

In order to systematically study the issue of emotion communication, a more detailed and explicit model is needed. A model of decoding rules and emotion judgments was proposed which explicitly shows the factors affecting decoding rules and then emotion judgments and enables us to make systematic hypotheses. Cross-cultural and developmental studies on the actual performance in the communication of emotion will contribute to crystallizing the model.

In addition, two questionnaire studies were reported which revealed the cultural decoding rules on the expression of emotion in a public or private situation indicating that while the patterns of expression of six basic emotions were similar in the private situation between American and Japanese subjects, those in the public situation were quite different between them. That is, while the expression of disgust was the most inhibited among Japanese subjects, sadness was the most inhibited among American subjects. The results were consistent with the previous observation study (Ekman & Friesen, 1975).